

第20回新潟救急医学会

日時 平成2年7月7日(土)
午後2時～
会場 新潟大学医学部大講堂

一般演題

1) 妊娠分娩を契機に発症した急性肺水腫の
2例

各務 博・三間 聡
佐藤 誠・鈴木 栄一
来生 哲・荒川 正昭 (新潟大学第二内科)
谷 啓充 (同 産婦人科)
田村 雄助 (同 第一内科)

妊娠、出産にともなって発症した、急性肺水腫の2例を経験したので、報告する。症例1は24才初回妊娠の妊婦。切迫流産を疑われ入院したのち、 β 2刺激薬の治療を受けたところ、動悸、呼吸困難が出現した。症例2は、34才の妊婦。双胎、妊娠中毒症との診断で経過観察されていたが、分娩目的で入院した後、羊水流出感にともなって呼吸困難、動悸、チアノーゼが出現した。2例とも著明な低酸素血症が認められ、胸部X線写真で、肺水腫と診断された。また、フロセמידの使用により、呼吸状態、胸部写真の急速な改善を認めた。病態が改善した後行った心エコーで、症例1では僧帽弁狭窄、閉鎖不全症を、症例2では、僧帽弁閉鎖不全症を認めた。

以上より、2例とも、NYHA I度として潜在し、心エコー施行前には、指摘し得なかった僧帽弁疾患が、妊娠分娩に伴う治療や合併症によって急性肺水腫として顕在化したと考えられた。

2) 当院におけるライ症候群の臨床的検討

佐藤 雅久・石塚 利江
渡辺 徹・阿部 時也 (新潟市民病院)
小田 良彦 (小児科)

当科で経験した確定的ライ症候群を示し本症に対する血漿交換の有用性を報告した。

対象は、1980年3月より1989年3月までの9年間に当科に入院した確定的ライ症候群8例で、男5例、女3例であった。発症年齢は6カ月より3才2カ月で、平均2才5カ月であった。入院時のステージ分類と治療、予後の関係では、ステージIIで入院した2例は、1例は保存的治療で後遺症なく治癒し、他の1例は急速にステージIIIに進行したが、血漿交換を施行し軽度の知的障害(IQ61)とてんかんを生じたのみであった。尚、血漿交

換は1987年1月より施行している。ステージIIIで入院した例は6例で、保存的治療が行われた2例は死亡し、交換輸血が施行された2例は、1例が死亡し1例が重度の後遺症を残した。血漿交換を施行した2例も重篤な後遺症を残している。血漿交換は、進行例には無効であるが、ステージIIないしステージIIIの早期には有用な治療法と思われた。

3) 急性心筋梗塞と心筋ミオシン軽鎖Iに
ついて

宮北 靖・渡辺 賢一 (燕労災病院 循環器内科)
政二 文明 (桑名病院 循環器内科)

急性心筋梗塞の診断や重症度の判定に梗塞部心筋より流出するGOT、CPK等の物質がよく用いられているが、CPKは最高値の判定に数時間毎の採血を要する。冠動脈内血栓溶解療法(PTCR)により再灌流が得られると値が変動する等の問題点も挙げられている。一方、梗塞部心筋から流出する指標物質として、心筋の構造蛋白である心筋ミオシンのサブユニット、ミオシン軽鎖Iが注目され、その測定キットが開発されている。今回我々はこの測定キットを用いて急性心筋梗塞での有用性を検討した。ミオシン軽鎖Iは心筋梗塞発症後 3.4 ± 1.2 日で最高値に達し、異常高値は 15.5 ± 7.9 日持続するなど、他の酵素に比して遅く最高値に達し、長く異常値が続くという結果を得た。また、ミオシン軽鎖I最高値はKilip分類や慢性期左室駆出率とよく相関し、重症度の判定に有用であると思われた。

4) 新潟市民病院救命救急センターにおける
DOAの経験

三井田 努・本多 拓 (新潟市民病院救命救急センター)
樋熊 紀雄 (同 循環器科)

新潟市民病院救命救急センターでは、過去3年間に151例のDOAを経験した。DOAの頻度は全救急患者の0.63%を占め、男性、高齢者に多かった。DOA原因は内因性(疾病によるもの)が99例と2/3を占め、その中で急性心不全とされる瞬間死が30例(30%)と多く、急性心筋梗塞17例、急性肺水腫3例を加え、心疾患が半数を占めていた。外因性DOAでは交通外傷が26例と多かったが、窒息も12例見られた。151例のうち13例(8.6%)が蘇生されたが、社会復帰できたものは1例(0.7%)